研究を楽しむためのヒューマン・コミュニケーション

Human communication for enjoying research

徳島大学大学院社会産業理工学研究部
水口仁志

講義，実習，委員会や会議のほか，雑多な業務に追われているという話は得てして愚痴につながりやすい。しかしそのような日々の中でも心躍る場面がたくさんあるから，大学での仕事にやりがいと生きがいを見出すことができる。筆者の場合，文献情報や実験データなどを突き合わせ，学生を含めた共同研究者と意見交換することがまさにそれにあてはまる。研究の進捗は，なかなか当初予定の通り首尾よくとはいかないが，直面する技術的問題の解決を重ねながら，プロポーザルに描いた餅を具現化していく作業は心の底から楽しいと思えるのである。また，こうした研究活動における成功体験は，真に実りある教育として重要だと筆者は信じている。

少し視点を引いて考えてみると，様々な意見交換の中において，これは行けるかもしれないとか，面白いアイディアだとか，そういうひらめきや気付きに出会う確率は高いように思う。ひとつのデータであっても，見方によってはその価値が全く異なることはよくあることで，「幸運はそれを待ち望む準備ができた心だけにやってくる」というパスツールの言葉を思い出せば，アンテナを大きく広げてデータと対峙することは，きっとその確率をさらに高めるだろう。であるならば，有意義な意見交換を促すための準備や仕掛けは，研究を楽しむための重要な要素であるに違いない。読者諸氏におかれても，それぞれの職場環境の中で様々な工夫を凝らしているものと想像する。

研究を進める上で，グループ内での意思の疎通や情報共有は，いつの時代でも必要不可欠である。研究の進捗やデータはもとより，研究の目的やそこに至るまでの経緯など，様々な質の情報がチームで共有されることは重要である。この際，日頃から顔を合わせてディスカッションを重ねることはひとつの理想的なスタイルであろう。筆者はかつて学生ひとりひとりに週 1〜2 回のスケジュールを決めて細かく打ち合わせを行っていたことがある。人数が少ない時期だったということもあるが，このときほど情報や考えを互いに共有できたと実感したことはない。手帳を開けば毎週ぎっしりと予定が詰まるほど忙しかったが，楽しい時間でもあった。しかし，限られた時間の中で多くのタスク処理が求められる今日においては工夫が必要である。また，多かれ少なかれ構成員が毎年入れ替わる大学の研究室では，その時々の顔ぶれや人数によって，より良いやり方があるに違いなく，筆者は今もなお試行錯誤を続けている。ちなみに筆者の所属する学科では，学部 1 年生を対象としたゼミが開講されている。教員ごとのグループに分かれて活動し，その結果について発表するという内容であるが，筆者のグループでは，メンバーの希望で実験作業を行うこととなった。週 1 回の 1 コマだけでは時間が足りない。グループ内のやり取りには自然と LINE が使われるようになった。簡単な連絡やアドバイスならほぼリアルタイムでできるのは便利だし，彼らにとっても情報共有のツールとして使いやすいのだろう。

思えば筆者の研究テーマである，トラックエッチ膜フィルター電極とそれを搭載したフロー電解セルは，共同研究者の先生とのディスカッションから産まれた着想であり，それが成就して FIA 懇談会へ参加する機会を得た。研究が楽しいと感じるときはきっと，チームのメンバーは互いに win-win の関係にある。研究を楽しむために，対話のチャンネルは常に可能な限り広く開けておきたいものである。